



## 「9歳の節」と発達保障

# 自閉スペクトラム症と9歳の節 ユニークな心理化と自己理解

別府 哲

**要旨** 心の理解には、直観的心理化と命題的心理化の2つのレベルがある。障害のない定型発達児が両者を形成するのに対し、知的遅れのない自閉スペクトラム症児は直観的心理化に弱さをもったまま命題的心理化のみを形成すること、それが9歳過ぎであることが指摘されてきた。しかし、それを自閉スペクトラム症当事者がどう体験しているかに焦点をあてた研究は十分なされていない。本研究ではユニークな心の理解が当事者にとっての意味を探り、そこから導き出される支援を検討した。自伝や心理面接資料より、自閉スペクトラム症児は、命題的心理化を獲得することで、直観的心理化を自分もたない異質性に気づき、それは自明の世界が崩壊するほどの衝撃であることを明らかにした。一方、自閉スペクトラム症児者に直観的心理化を形成することは、直観的心理化そのもののありようからして可能であること、それは、他者と情動的に通じ合う情動共有体験の保障であることを論じた。併せて9歳過ぎの自閉スペクトラム症児者にとっては、情動体験を言語化し物語ること、そしてそれを他者と共有することが自己感を立ち上げるために特別な意味をもつことについて、考察した。

**キーワード** 自閉スペクトラム症、直観的心理化、異質性、情動共有体験、物語ること

## 1 自分の異質性 (otherness) への気づき

障害のない定型発達 (Typical Development; 以下, TD) 児は、9歳の節を越えることで、メタ認知をはじめとする、第三者の視点から客観的に物事を認知する能力を獲得し始める。田中は講演の中でこれを、「状態のなかに法則性をとらえる」とした (京都教職員組合養護教員部, 1988)。あわせてこの時期 TD 児はその認知能力を用いて、第三者から自分がどう見えるかを問い自己理解を深めるようになる。

知的遅れのない自閉スペクトラム (Autism Spectrum Disorders; 以下, ASD) 児者もこの時

期に自分がどう見えるかに気づく点は、TD 児と同じと考えられる。しかしその質は異なる。例えば ASD 当事者であるガーランド, G. (2000) は9歳の時、すべてのものには「向こう側」と「内側」があることを発見した。「内側」は表に現れる「向こう側」ではないもの、人間でいえば行動や見た目ではない心である。そして次のように述べている。

向こう側と内側の発見が契機となって、私は自分自身のことを、よりはっきりと周囲と比較して考えるようになっていったのだ。他の人々には簡単そうなことが、なぜ自分だけにはこんなに難しいのだろうか? (中略) 私のどこがおかしいんだろう? どうして私は本物の人間になれないんだろう? (pp. 125-126)

TD 児は、第三者から見た自分を意識しはじめ

ることで、他者との差異性 (difference) に気づき悩む<sup>1)</sup>。一方まだ少数ではあるが、自分は他の誰かではなくなぜ「私」でなければならなかったのかという、「私」の個別性 (individuality) が見出せない悩み (自我意識) を初めて感じ始める時期でもある (天谷, 2011)。これは、青年期以後のアイデンティティ確立の出発点になる。

しかし ASD 児は、差異性や個別性を問う以前の問題に直面する。それは、自分や他者には表面に現れる言動 (「向こう側」とは異なる、「内側」である心をもっていることをこの時期まで知らなかったことに気づくということである。後で述べるが TD 児は生後早い時期 (1~2歳) より、他者に心があることを踏まえた振る舞いが可能になる。つまり、9歳ころの TD 児にとって、心の存在は半ば自明の事実である。それに対し ASD 児は、9歳ころ「他の人たち (TD 児者: 筆者註) には簡単そうなこと」(ガーランド, G., 2000) である心の存在を、それまで自分だけが知らなかったことに気づく。これも後で述べるが、心には言語で理解してわかり合うレベルだけでなく、その基底に情動的に他者と通じ合いわかり合うレベルがある。ASD 児は9歳すぎに心の存在に気づき、その時期に獲得するメタ認知を用いて心を言語で理解しようとする。しかしそれはあくまで言語による「向こう側」からの解釈にすぎない。そして、情動的に通じ合うレベルの「内側」の心を自分もっていない空虚さに直面する<sup>2)</sup>。このように ASD 児は、他者との差異性、個別性をとらえる以前の、自分の異質性 (otherness) に気づくのである。ガーランド, G. の言葉は、この気づきが、それまでの世界が壊れるほどの自明性の揺らぎといえる衝撃的な出来事であることを示している。

本稿は TD 児とは質が異なる ASD 児の心の気づきと苦悩を、9歳の節に至るまでの他者と自己の関係性と心の理解のありようの発達から検討する。あわせて、それが要請する支援についても論じることとする。

## 2 TD 児の心の理解の発達

人はある時期から、行動の背景に心というものが存在することに気づく。心を理解することは、心と行動の関係に気づくことであり、人の心を理解することでその人の次の行動を予測できるようになることでもある。近年の研究では、心の理解は単一のものではなく、少なくとも二つの心理化から構成されると考えられている。別府・野村 (2005) はその一つを、言語で説明はできないが直観的に振る舞いとして理解できる直観的心理化 (intuitive mentalizing)、もう一つを言語的命題として理解し説明できる命題的心理化 (propositional mentalizing) とした。これは、Hughes (2011) の intuitive social understanding と reflective social understanding, Butterfill & Apperly (2013) の implicit mentalizing と explicit mentalizing に対応すると考えられる。

直観的心理化をもつと、言語での説明はまだできないのに、心を理解した振る舞いができるようになる。例えば1歳半すぎの TD 児は泣いている母親を見ると、自分の好きな玩具を持っていて慰めようとする。心を理解した振る舞いには、心と行動の関連の理解と、自分と他者の心は同じでないことの理解が必要である。慰める行動は、母親は悲しい (心) から泣く (行動) ことと理解と、自分は悲しくない (相手と違う心をもつ) から泣かないことと理解を必要とする。一方この年齢では、なぜそう振る舞ったのかを問われても TD 児自身、説明することはできない。

この直観的心理化があることで可能な振る舞いは、発達の中で多様になる。例えば幼児期においても、相手が怒ることを予測しての意図的な行動であるからかい (teasing)、助ける行動、だまし (deception) (2歳ころ)、欲しくないプレゼントをもらった際に相手を落胆させないために作り笑いをするなどの社会的表示ルール (social display rule) の獲得 (4歳ころ)、嘘をつくことや、相手に自分の心を知らせない秘密をもつこと (4~6